



建物の形は昔のまま。もとの屋根は70センチほどの厚さがある茅葺きで、断熱効果があるためそのまま残し、上からガルバリウム鋼板を被せて耐久性とデザイン性を向上させた



掘りごたつのある板の間。浮遊りの杉の床は美足が心地よい。和の空間に緑台風のラジヒボードや飾り屏がよく似合う

このモデルハウスでは無垢の木やアイアン、ガラスやタイルなど、さまざまな素材を取り入れたデザインの実例を目にすることができる



料理をしながら家族と会話ができるオープンタイプの対面キッチン。ダイニングに大きな書棚を設けたら、家族のライブラリスペースとしても活躍してくれる



西洋漆喰と無垢の木でつくるアンティークな住空間

明治初期に建てられた古民家をリノベーションして生まれた「風のくら」。戦前の日本が豊かな時代に職人が丹精込めて建てた木の家は、150年を経てもなお、堂々とした姿のまま存在し続けている。

素晴らしい建築物に出会ったハウスの代表の三上信比吉さんは、ここを舞台に家づくりの考え方を描き出すことにした。基本的な間取りはそのままだが、女性コーディネーターが現代的なライフスタイルに合わせてインテリアをブラッシング。無垢の木やスベイン漆喰など自然素材をふん

だんに使い、アンティークな趣を感じさせるステンドグラスやアイアンで洋のエッセンスをプラス。オリブの食器棚や、タイル張りの洗面台など、見せる造作にもこだわった。昔の家には必ずあった通り土間を生かして薪ストーブのある談話室をつくり、周囲の豊かな緑を感じられるように

窓の位置を工夫するなど、家内と外のつながりを感じさせる演出も魅力的だ。ウッドデッキと掘りごたつのある板の間や、バスコーナーのある浴室など、温泉宿を思わせる楽しいアイデアも見逃せない。新しいのに懐かしくて、ワクワクするけど落ち着ける家づくりのヒントが凝縮しているのだ。

家づくりの展示場訪問
Interview with model house.

モデルハウス『風のくら』

素材にこだわり、手間をかけてつくる住むほどに愛着が深まる古民家スタイル

筑紫野市の山間に昔の名残をどどめて立っていた明治初期の旧家の家屋。間取りや構造はそのままだが、現代風にアレンジして生まれたのが「風のくら」です。リノベーションされた里山の古民家には、暮らしを豊かにするさまざまなエッセンスが盛り込まれています。



高い天井に構える太い梁、テラコッタ風タイルを張った通り土間、アンティークガラスをはめ込んだ建具など、目に入るものすべてが強く印象に残る空間